



都市の忘れ物

商店街の閑寂に見る懐かしい風景。
それは過去に見た路地風景に近いもの。
なびく洗濯物、漂うご飯の香り、丸っこい子供たち。
ここには私たちが忘れていた風景がある。

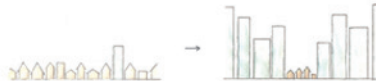
商店街から見る。



商店街裏側から見る。

□INTRODUCTION

経済優先の都市開発により均質化された都市空間。
このような現代都市にも、商店街や路地といった趣多き空間は少なからず存在する。
しかし、都市再開発やマンション開発により趣多きものは失われつつあり、いつまで存続しうるかわからない状況である。
趣多き都市の風景として長く残し続けてきた路地空間を、現代都市の環境を再考する機会として蘇らせる。
路地性を継承することで、失われつつある都市の軸足を取り戻す。



□BACKGROUND

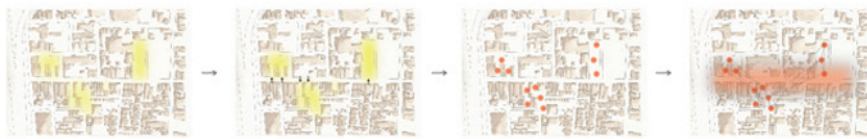
路地空間は今後、大規模開発や建物更新の際のセットバックによる道路幅員などの整備が図られる可能性が高く、
開発が進められれば趣多きスケール感やコミュニティ形成の場としての役割を失う。
住民の生活の場であるだけでなく、長く残し続けてきたこの都市風景の深層を想念して、
現在路地空間の保全再生活動を試みる団体も増加している。



都市野地区の再開発として建設された
基合屋プライムセントラル。
都市野地区は基合屋駅や基合屋の中心
部からも近いため増築のポテンシャル
は高く今後も開発が進むと考えられる。

□PROGRAM

趣多き空間をコアとして商店街の裏側に併設する。
本計画では商店街から離れた敷地のうちひとつを例に取り、路地空間を自ら作り出す建築を設計する。



1. 四輪寺商店街の「裏抜け」部分を抽出し、本設計の計画地とする。
2. 裏抜け部分に、コアを作り出す建築を併設する。
3. コア空間では新たなコミュニティが生まれる。
4. 新たなコミュニティはコア周辺のネットワークを形成し、一つの大きなコミュニティとなる。

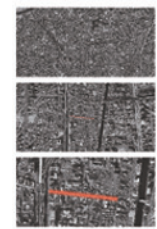
□SITE

愛知県名古屋西区郡山町1丁目11 四輪寺商店街



四輪寺商店街

基合屋駅から徒歩15分。堀川に架かる五島橋から西に伸びる四輪寺商店街。
四輪寺商店街、四輪寺本町商店街、西四輪寺商店街の3つからなり、基合屋駅が開通された際に、城下町の商店街として整備された。
基合屋で最も古い商店街で、大塚と間近に基合屋の門前街として残している。
裏通りは1919年式（明治中期）以降で、この付近に工場が建設され、習志見鉄道駅が開業するまで基合屋の盛り場として発展し、商店街は江戸を越え西へと延長された。
江戸は昭和に入ると埋め立てられ、その代用線には当時客車電気が走り、基合屋には商店が並び、劇場や喫茶も設けられていた。今も劇場の面影が残っている。
基合屋三九堂事務所、現、大塚として四輪寺という時代が昭和初期まで残りますが、戦後はその流れがなくなり、かつての賑わいを見ることはできない。
現在、商店街は空き店舗、空き家、駐車場などが目立ち、「幽霊街状態」となっている。



四輪寺基壇

四輪寺基壇には昔懐かしい建物の面影が数多く残る地域である。
堀川にかかる五島橋付近は、幸い戦火をまぬがれたため、町並みは江戸時代の面影を色濃く残す。
四輪寺基壇にある砂隠道（しげみち）は元禄13年（1726年）、四輪寺付近から由比、1889年開港場として生まれたことから、
藩が町火災対策として堀川端の四輪寺の裏を拡張し、道幅を4間にしたところから砂隠道と呼ばれるようになった。





□ロジ

“高層を建物が高層部で、自動車が行き交うことができず、歩行的空間として利用されるもの”と定義する。

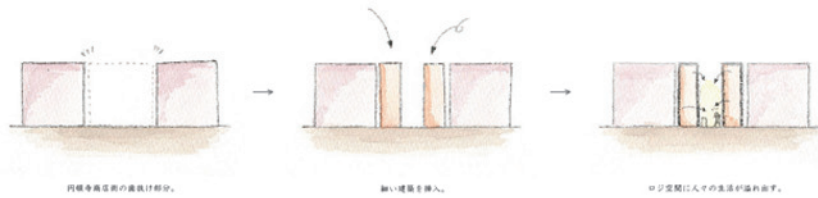
路地空間 → 人間の感覚や動きに適合した規模や物の大きさのヒューマンスケールにより形成されている。生活する上での行動が溢れ出す路地は暮らしの場長であり、コミュニティの形成に重要な役割を担う。



都市野の路地



ロジ生成ダイアグラム

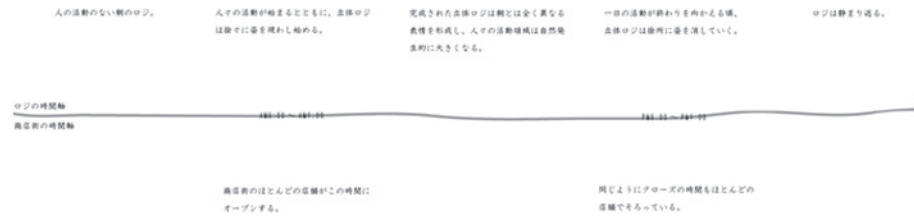


□立体ロジ

1階のすべり出し戸を開くことにより、2階レベルに歩行可能な空間が出現する。人々の行動により自然発生的に現れる「立体ロジ」。立体ロジにも人々の生活は溢れ出し、誰も体験したことのないような観望な空間ネットワークが生まれる。また立体ロジによりこの建物は周辺とは全く異なる表情を見せることになる。立体ロジは高層部に強く親しい時間軸によりコントロールされる。



立体ロジ生成ダイアグラム



section and elevation scale: 1/30

